

上海博物館蔵戦国楚簡における誤写の可能性について

——『武王踐阼』『鄭子家喪』を中心に——

草 野 友 子

要 旨

本稿は、中国の新出土文献「上海博物館蔵戦国楚簡」（以下、上博楚簡）中の誤写の可能性のある文字について考察するものである。本稿では、近年公開された『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』所収の『武王踐阼』『鄭子家喪』を中心に考察を進める。

第一章では、上博楚簡『武王踐阼』における「義」と「敬」とについて検討する。現行字体では、「義」と「敬」とは全く異なる字形であるが、楚系文字上では酷似している。本章では、上博楚簡『武王踐阼』中に「敬」を「義」と誤写したと思われる箇所が存在することを指摘し、その点に関して考察を加える。

続く第二章では、上博楚簡『武王踐阼』における「志」と「忘」とについて検討する。上博楚簡『武王踐阼』には、周の武王が刻んだ自戒の銘文として「民之反側、亦不可志」という一文がある。本章では、この箇所を「志」と解釈すべきか、それとも字形が近似する「忘」と解釈すべきかという問題について、字形と内容面の二方向から考察する。

第三章では、上博楚簡『鄭子家喪』における「而」と「天」について検討する。「而」と「天」とは、楚系文字上で酷似しており、上博楚簡『鄭子家喪』では、「而」と認定するか、「天」と認定するかについて問題となっている箇所がある。本章では、他の用例との比較を通して、文字を確定する。

以上のように、本稿では、上博楚簡中の字形に関して問題がある箇所について各々検討を加え、筆者の見解を述べていきたい。

キーワード：上海博物館蔵戦国楚簡（上博楚簡）、『武王踐阼』、『鄭子家喪』、誤写、楚系文字

はじめに

本稿は、中国の新出土文献「上海博物館蔵戦国楚簡」（以下、上博楚簡）中の誤写の可能性のある文字について考察するものである。

まず、上博楚簡の概要を紹介しておこう。上博楚簡とは、1994年に上海博物館が香港の古玩市場で購入した、戦国時代の楚の竹簡群を指す。全1200余簡、約35000字。フリーズドライの方法で3年かけて保存処理されたのち、1997年から解読と整理が進められた。2001年から馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書』（上海古籍出版社）として順次公開が進んでおり、2008年までに第一分冊から第七分冊までが刊行されている（続刊）¹⁾。その内容は、儒家系文献を中心に、道家系文献、兵学に関する文献、楚の在地性文献及び春秋時代の各国を舞台にした説話等、非常に多様である。中には佚文も多く含まれているため、戦国中期以前の思想史の空白を

埋める、極めて重要な資料群であると言える。竹簡に書かれている文は、「楚系文字」と呼ばれる字体で筆写され、文字学の方面でも注目を集めている。

本稿では、近年公開された『上海博物館藏戦国楚竹書（七）』（馬承源主編，上海古籍出版社，2008年12月）所収の『武王踐阼』『鄭子家喪』を中心に、上博楚簡中の誤写の可能性のある文字について考察する。以下、上博楚簡『武王踐阼』の「義」「敬」及び「志」「忘」、上博楚簡『鄭子家喪』の「而」「天」の三つの事例を取り上げ、各々検討を加えていきたい。

1. 上博楚簡『武王踐阼』における「義」と「敬」

上博楚簡『武王踐阼』は、周の武王と師尚父（太公望）との問答体であり、師尚父が武王に丹書の言を告げ、武王が様々な器物に自戒の銘を刻むという内容である。竹簡は全15簡。篇題はなく、現行本『大戴礼記』武王踐阼篇と多く重複することから、「武王踐阼」と名付けられた。

まず、全文の釈文・訓読を掲げてみよう²⁾。[]内は原釈文が補っている文字、〈 〉内の算用数字は竹簡番号を示す。なお、第1簡から第10簡までは通読できるが、第10簡と第11簡との間には脱簡があると見られ、通読できないため、前半部と後半部とに分けて掲載する³⁾。

（前半部：第1簡～第10簡）

[武] 王問於師尚父曰、「不知黄帝・顓頊・堯・舜之道在乎。意豈喪不可得而睹乎。」師尚父曰、〈1〉「在丹書。王如欲觀之，盍齊乎。將以書示。」武王齊三日，端服冕，逾堂階，南面而立。師尚父〈2〉[曰]、「夫先王之書，不与北面。」武王西面而行，曲折而南，東面而立。師尚父奉書，道書之言曰、「怠〈3〉勝義則喪，義勝怠則長，義勝欲則從，欲勝義則兇。【A】仁以得之，仁以守之，其運百〈4〉[世]。不仁以得之，仁以守之，其運十世。不仁以得之，不仁以守之，及於身。」

武王聞之恐懼，為〈5〉銘於席之四端曰、「安樂必戒。」右端曰、「毋行可悔。」席後左端曰、「民之反側，亦不可志。」【B】後右端曰〈6〉、「所諫不遠，見邇所代。」為機曰、「惶惶惟謹口。口生敬，口生詬。慎之口口。」鑑銘曰、「見其前，必慮其後。」〈7〉盤銘曰、「与其溺於人，寧溺於淵。溺於淵猶可游，溺於人不可救。」楹銘誨、「母曰何傷。禍將長。〈8〉母曰惡害。禍將大。母曰何殘。禍將然。」枝銘誨曰、「惡危。危於盆纏。惡失。失道於嗜慾。惡〈9〉[忘。忘]於貴福。」戶銘誨曰、「位難得而易失，士難得而易外。母勤弗志，曰余知之。母……」〈10〉

[武] 王 師尚父に問いて曰く、「黄帝・顓頊・堯・舜の道在るを知らざらんか。意も豈に喪びて得て睹るべからざらんか。」と。師尚父曰く、「丹書に在り。王如し之を觀んと欲すれば、盍ぞ齊せざるか。將に書を以て示さんとす。」と。武王 齊すること三日，端服して冕

し、堂階を逾り、南面して立つ。師尚父〔曰く〕、「夫れ先王の書、北面を与さず。」と。武王西面して行き、曲折して南し、東面して立つ。師尚父書を奉じ、書の言を道いて曰く、「怠義に勝てば則ち喪び、義怠に勝てば則ち長じ、義欲に勝てば則ち従い、欲義に勝てば則ち兇なり。仁以て之を得、仁以て之を守れば、其の運は百〔世〕ならん。不仁以て之を得、仁以て之を守れば、其の運は十世ならん。不仁以て之を得、不仁以て之を守れば、身に及ばん。」と。

武王之を聞きて恐懼し、銘を席の四端に為して曰く、「安樂には必ず戒めよ。」と。右端に曰く、「悔ゆべきを行う母かれ。」と。席後の左端に曰く、「民の反側も、亦た志すべからず。」と。後の右端に曰く、「諫むる所遠からず、邇の代わる所を見よ。」と。機に為して曰く、「惶惶として惟だ口を謹め。口は敬を生じ、口は詬を生ず。之を口口に慎め。」と。鑑銘に曰く、「其の前を見れば、必ず其の後を慮れ。」と。盤銘に曰く、「其の人に溺るるよりは、寧ろ淵に溺れよ。淵に溺るるは猶お遊ぶべきも、人に溺るるは救うべからず。」と。楹銘の誨に、「何ぞ傷なわれんと曰う母かれ。禍は將に長ならんとす。胡ぞ害なわれんと曰う母かれ。禍は將に大ならんとす。何ぞ残なわれんと曰う母かれ。禍は將に然らんとす。」と。枝銘の誨に曰く、「悪くにか危うからん。盆鏈に危うし。悪にか失わん。道を嗜慾に失う。悪にか〔忘れん。〕貴福に〔忘る。〕」と。戸銘の誨に曰く、「位は得難くして失い易く、士は得難くして外んじ易し。勤むる母く志さざれば、余之を知ると曰わんや。母……」

（後半部：第11簡～第15簡）

武王問太公望曰、「亦有不盈於十言、而百世不失之道、有之乎。」太公望曰、「有。」武王曰、「其道可得〈11〉而聞乎。」太公望曰、「身則君之臣、道則聖人之道。君齊將道之。君不齊則弗道。」武王齊七日、太〈12〉公望奉丹書以朝。太公南面、武王北面而復問。太公答曰、「丹書之言有之曰、「志勝欲則〈13〉昌、欲勝志則喪、志勝欲則従、欲勝志則兇、敬勝怠則吉、怠勝敬則滅。不敬則不定、弗〈14〉強則枉、枉者敗、而敬者万世。使民不逆而順成、百姓之為経。」丹書之言有之。」〈15〉

武王太公望に問いて曰く、「亦た十言に盈たざる有りて、百世失わざるの道、之れ有らんや。」と。太公望曰く、「有り。」と。武王曰く、「其の道得て聞くべけんや。」と。太公望曰く、「身は則ち君の臣なるも、道は則ち聖人の道。君齊すれば將に之を道わん。君齊せざれば則ち道わず。」と。武王齊すること七日、太公望丹書を奉じて以て朝す。太公南面し、武王北面して復た問う。太公答えて曰く、「丹書の言に之れ有りて曰く、「志欲に勝てば則ち昌ん、欲志に勝てば則ち喪い、志欲に勝てば則ち従い、欲志に勝てば則ち兇、敬怠に勝てば則ち吉、怠敬に勝てば則ち滅ぶ。敬せざれば則ち定まらず、強めざれば則ち枉、枉する者は敗れ、而して敬する者は万世。民をして逆わずして順成せしむるは、百姓

の経と為る。」と。丹書の言に之れ有り。」と。

以上が上博楚簡『武王踐阼』の全文である。以下、下線部【A】【B】について考察を進めていきたい。

まず、下線部【A】について検討する。この箇所は、上博楚簡『武王踐阼』第3簡・第4簡にあたる。ここに記載されている丹書の言を以下に再掲しよう。

怠勝義則喪，義勝怠則長，義勝欲則從，欲勝義則兇。

この箇所について、「釈文考釈」（以下、原釈文）を担当した陳佩芬氏は、「怠勝義則喪，義勝怠則長」と釈し、「義」を正義の意とする。そして、「如果懈怠戰勝正義，則將滅亡；而正義戰勝懈怠，則能保持久遠（もし懈怠が正義に勝てば、まさに滅亡し、正義が懈怠に勝てば、長く保つことができる）」と説明を加えている⁴⁾。

一方、復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生讀書会（以下、復旦讀書会）⁵⁾は、以下のように述べる。

簡文此句“怠勝義則喪，義勝怠則長”，《大戴禮記》作“敬勝怠者吉，怠勝敬者滅”，乙本簡14作“敬勝怠則吉，怠勝敬則威（滅）”。“怠”是怠慢不敬，正與“敬”意思相反，將“怠”與“敬”對舉於義為長，簡文此處將“怠”與“義”對舉，則恐係因下文“義勝欲”，“欲勝義”之“義”而將“敬”誤抄為“義”。與這段類似的文字還見於《六韜》：“故義勝欲則昌，欲勝義則亡；敬勝怠則吉，怠勝敬則滅。”

復旦讀書会は、「怠」と対応するのは「敬」であることを指摘し、下文の「義勝欲則從，欲勝義則兇」の「義」によって、「敬」が「義」と誤写された可能性を提示する。

現行本『大戴禮記』武王踐阼篇では、「敬勝怠者吉（強），怠勝敬者滅（亡），義勝欲者從，欲勝義者凶。」⁶⁾と記されており、「敬」と「怠」，「義」と「欲」とが対応関係にある。また、上博楚簡『武王踐阼』第14簡には、「志勝欲則昌，欲勝志則喪，志勝欲則從，欲勝志則兇，敬勝怠則吉，怠勝敬則滅。」という類似の文が見え、ここでもやはり「敬」と「怠」とが対応関係にある。

では、なぜ上博楚簡『武王踐阼』第3簡・第4簡では、「義」と「怠」とが対応しているのでしょうか。前述の通り、復旦讀書会は誤写の可能性を指摘しているが、果たしてそのように解釈して良いのであろうか。

ここで注目すべきは、「義」と「敬」の字形である。現行字体では、「義」と「敬」とは全く異なる字形となっているが、楚系文字の上では、「義」と「敬」とは字形が酷似している。この点

については、裘錫圭「談談上博簡和郭店簡中的錯別字」（饒余頤主編『華学』第6輯，紫禁城出版社，2003年6月）において、郭店楚簡『緇衣』・上博楚簡『緇衣』⁷⁾の例が挙げられている。

上17“於□義之”，郭店34及今本皆作“於緝熙敬之”，如果把上17的義字跟郭34的“敬”字對照一下，就可以發現二者的字很相似，前者應是對寫法跟後者相類的“敬”字的誤摹。

ここでは、「義」と「敬」とは非常に似た字形であり、実際に誤写されている例があることを示している。

では、上博楚簡『武王踐阼』の「義」と「敬」の字形を確認してみよう。

〔図1〕上博楚簡『武王踐阼』における「義」と「敬」

義					
敬					

他の上博楚簡の文献の用例もいくつか確認しておこう。

〔図2〕上博楚簡における「義」「敬」の用例

	孔子詩論	緇衣	季庚子問於孔子	その他	
義	 第22簡	 第23簡	 第7簡	 君子為礼 2	 姑成家父 7
敬	 第5簡	 第15簡	 第16簡	 昔者君老 4	 中弓 21

上記の用例は、「義」と「敬」とが極めて似た字形であることを証明しており、これらは互いに誤写されやすい字形であると言える。従って、上博楚簡『武王踐阼』の「怠勝義」「義勝怠」の「義」は、「敬」を誤写したものである可能性が高いと考えられる。すなわち、この一文はやはり、現行本『大戴礼記』武王踐阼篇の記述（「敬勝怠者強，怠勝敬者亡」）や、上博楚簡『武王踐阼』第14簡の記述（「敬勝怠則吉，怠勝敬則滅」）と同様、「敬」と「怠」「義」と「欲」が対応しているのである。

「敬」を「義」と誤写したのは、復旦讀書会が指摘するように、下文の「義勝欲則從，欲勝義則兇」の「義」によって誤写されたという可能性もあるが、それだけではなく、「義」と「敬」とが酷似する字形であるという理由から誤写されたとも考えられる。

以上により、上博楚簡『武王踐阼』の「怠勝義」「義勝怠」の「義」は、「敬」の誤写であり、「怠勝敬則喪，敬勝怠則長，義勝欲則從，欲勝義則兇。」と釈読すべきであると提言したい。

2. 上博楚簡『武王踐阼』における「志」と「忘」

上博楚簡『武王踐阼』には、他にも検討すべき字形の問題が存在する。それは、前章に掲げた全文の【B】の箇所、すなわち武王が「席後左端」に刻んだ銘文「民之反側，亦不可志」（第6簡）の「志」についてである。この箇所について、原釈文では「民之反側，亦不可志」と、復旦讀書会は現行本『大戴礼記』武王踐阼篇を参考に「不」を補って「民之反側，亦不可〔不〕志」と釈読している。他の諸研究者も各々の解釈はあるものの、みな「志」と釈読している。果たしてその解釈は妥当なのであろうか。

この箇所は、現行本『大戴礼記』武王踐阼篇において、「一反一側，亦不可以忘」とする場合と、「一反一側，亦不可忘」とする場合の大きく二通りの版本が存在する⁸⁾。

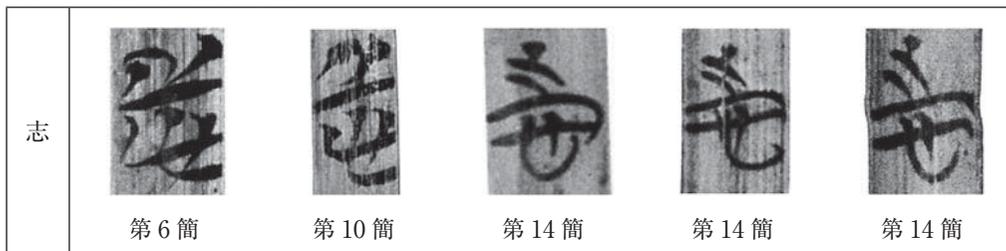
現行字体においても似た字形である「志」と「忘」は、楚系文字上でもやはり近似している。

〔図3〕上博楚簡における「志」「忘」の用例

	孔子詩論	周易	曹沫之陳	その他	
志	 第8簡	 第27簡	 第55簡	 緇衣 19	 民之父母 7
忘	 第6簡	 第20簡	 第54簡	 三德 9	 鮑叔牙与隰朋之諫 2

では、上博楚簡『武王踐阼』における「志」はどうであろうか。

〔図4〕 上博楚簡『武王踐阼』における「志」



上記の用例を見ると、『武王踐阼』の筆致は明らかに「志」である。これを根拠として、諸研究者はみな、第6簡を「志」と釈読しているであろう。しかし、第6簡の一文を解釈するには、「志」ではなく、「忘」とするほうが妥当な解釈ではなかろうか。まず、「民之反側，亦不可志」とすると、「不可志（志してはいけない）」というマイナス方向の教戒となってしまう。また、復旦讀書会は、「不可〔不〕志」として「不」を補っているが、妥当な推論であるものの、現行本『大戴礼記』武王踐阼篇の記述を重んじて「不」を加えても良いのかどうかという疑問が残る。一方、「民之反側，亦不可忘」として、「不可忘（忘れてはいけない）」とすると、「民が寝返りを打っている（困苦の状態）であることも、心に留めて忘れてはいけない」という教戒になるのではないか。このように解釈する方が文意も通じるため、妥当な解釈であると思われる。

従って、筆者はこの一文の「志」について、「忘」の誤写である可能性を指摘しておきたい。現行本『大戴礼記』武王踐阼篇において、「忘」と作るものと「志」と作るものと二通りの版本が存在しているのは、これらが誤写されやすいものであったことを暗に示しているとも言えよう。

3. 上博楚簡『鄭子家喪』における「而」と「天」

上博楚簡『武王踐阼』と同じ第七分冊に収録されている上博楚簡『鄭子家喪』においても、字形の問題が存在する。『鄭子家喪』は、鄭の子家の死をめぐって、楚の莊王が鄭を包囲するに至り、さらに鄭を救援した晋と両棠で戦い、大勝するという内容である。甲本と乙本とがあり、いずれも全7簡。篇題はなく、冒頭句に基づく仮称である。原釈文は上博楚簡『武王踐阼』同様、陳佩芬氏が担当している。まず、その釈文と訓読を掲げてみよう。なお、〈〉内の竹簡番号は甲本に基づく。

鄭子家喪，邲人來告。莊王就大夫而與之言曰，「鄭子家殺其君，不穀日欲以告大夫，以邦之病，〈1〉以及於今。天厚楚邦，使為諸侯正。【C】今鄭子家殺其君，將保其寵光，以及入地。如上帝鬼〈2〉神以為怒，吾將何以答。雖邦之病，將必為師。」乃起師圍鄭三月。鄭人請其故。王命答之曰，「鄭子〈3〉家顛覆天下之禮，弗畏鬼神之不祥，戕賊其君。余將必使子家母以成名位於上，而滅〈4〉覆於下。」鄭人命以子良為質，命使子家梨木三寸，疏索以紘，毋敢丁門而出，掩之城基。〈5〉王許之。師未還，晉人涉，將救鄭，王將還。大夫皆進曰，「君王之起此師，以子家之故。今晉〈6〉人將救子家，君王必進師以邲之。」王焉還軍以邲之，與之戰於兩棠，大敗晉師焉。〈7〉

鄭の子家^し喪し、邲人來たりて告ぐ。莊王 大夫に就きて之と云いて曰く、「鄭の子家 其の君を殺し、不穀 日び以て大夫に告げんと欲するも、邦の病を以て、以て今に及ぶ。天 楚邦を厚くし、諸侯の正と為さしむ。今 鄭の子家 其の君を殺すも、將に其の寵光を保ちて、以て地に入るに及ばんとす。如し上帝鬼神以て怒を為さば、吾 將に何を以て答えん。邦の病と雖も、將に必ず師を為さんとす。」と。乃ち師を起して鄭を圍むこと三月。鄭人 其の故を請う。王 命じて之に答えしめて曰く、「鄭の子家 天下の禮を顛覆し、鬼神の不祥を畏れず、其の君を戕賊^{しやうぞく}す。余 將に必ず子家をして成名を以て上に位する母くして、下に滅覆せしめんとす。」と。鄭人 命じて子良を以て質と為さしめ、命じて子家をして梨木三寸、疏索以て紘し、敢えて丁門より出す母く、之を城基に掩わしむ。王 之を許す。師 未だ還らざるに、晉人 涉りて、將に鄭を救わんとし、王 將に還らんとす。大夫皆進みて曰く、「君王の此の師を起すは、子家の故を以てなり。今 晉人 將に子家を救わんとし、君王必ず師を進めて以て之に邲^よる。」と。王 焉^{こゝ}に軍を還して以て之に邲り、之と兩棠に戦い、大いに晉師を敗る。

本篇においては、下線部【C】の箇所が問題となっている。原釈文では、「…於今。而後楚邦思為諸侯正」と釈読し、また復旦讀書会⁹⁾は、「於今而後、楚邦思為諸侯正」と釈読している。

この箇所については、先行研究においていくつもの解釈が提示されているが、ほとんどの場合、原釈文と同様に「而」と釈読されている。しかし、侯乃峰氏¹⁰⁾は、「而」について別の解釈を提示している。その解釈とは、第2簡の「而」を字形から「天」と、「後」を音通から「厚」と釈読し、「天厚楚邦」とするものである。侯乃峰氏は、「而」と「天」とが楚系文字において極めて似た字形であることを述べた上で、『鄭子家喪』中の他の「天」「而」の用例から、第2簡は「而」ではなく、「天」であることを指摘している。

では、実際に字形を確認してみよう。

〔図5〕 上博楚簡『鄭子家喪』における「而」と「天」

而	 甲本・第2簡	 甲本・第5簡	 乙本・第1簡	 乙本・第5簡
天	 甲本・第2簡	 甲本・第4簡	 乙本・第2簡	 乙本・第4簡

確かに上記のように、『鄭子家喪』における「天」と「而」とは、字形は類似するものの、明らかに書き分けがなされている。

では、他の上博楚簡において、「而」と「天」とはどのように書かれているのであろうか。

〔図6〕 上博楚簡における「而」「天」の用例

	孔子詩論	民之父母	容成氏	恒先	彭祖
而	 第2簡	 第6簡	 第52簡	 第13簡	 第1簡
天	 第7簡	 第2簡	 第9簡	 第5簡	 第1簡
	昭王与龔之腓	曹沫之陳	君子為礼	三德	鬼神之明
而	 第7簡	 第3簡	 第2簡	 第3簡	 第3簡
天	 第9簡	 第3簡	 第12簡	 第3簡	 第3簡

上記の用例からわかるように、「而」と「天」とは、楚系文字上で極めて似た字形である。このような用例は、「而」と「天」とが積読を誤りやすい字形であることをも示している。原釈文や諸研究者が誤って「而」と積読したのは、おそらくそのためであろう。侯乃峰氏が指摘するように、『鄭子家喪』では、「而」と「天」とが明らかに書き分けられている。従って、この箇所は侯乃峰氏の説に従い、「天厚楚邦」と積読すべきであろう。

「而」と「天」とは字形が酷似することから、文献上に「而」や「天」が登場した場合には、どちらの文字に認定すべきかということを常に念頭に置かねばならない。また、「而」と「天」とは、誤写される可能性が高い字形の一つであるとも言えるであろう。

おわりに

以上、各々の字形について検討し、筆者の見解を述べてきた。今後、誤写の用例が増えれば、新出土文献を積読する際の手がかりとなるだけでなく、これまで積読がなされてきた文献についても再検討することができよう。

注

- 1) 上博楚簡の書写年代については、2257 ± 65 年前という中国科学院上海原子核研究所の炭素 14 の測定値が紹介されている（「馬承源先生談上海簡」、『上博館藏戰國楚竹書研究』、上海書店出版社、2002 年）。1950 年を定点とする国際基準に従えば、前 308 ± 65 年、すなわち前 373 年から前 247 年となり、下限は秦の将軍白起が郢（楚の都）を占領した前 278 年となる可能性が高いことから、書写年代は前 373 年から前 278 年の間と推定される。
- 2) 本稿掲載の上博楚簡『武王踐阼』及び上博楚簡『鄭子家喪』の釈文は、原釈文と「簡帛網」(<http://www.bsm.org.cn/>) 及び「復旦大学出土文献与古文字研究中心」(<http://www.guwenzi.com/Default.asp>) 等に掲載されている論文・札記をもとに、筆者が最終的に確定したものである。紙幅の都合上、逐一の注記を省く。
- 3) なお、復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会（『《上博七・武王踐阼》校読』、復旦大学出土文献与古文字研究中心、2008 年 12 月 30 日）や劉秋瑞氏（「再論《武王踐阼》是兩個版本」、復旦大学出土文献与古文字研究中心、2009 年 1 月 20 日）は、前半部と後半部とで字体が異なる（竹簡の書写者が別人）、太公望に対する呼称が異なる（前半部は「師尚父」、後半部は「太公望」）等の理由から、前半部を甲本、後半部を乙本と称し、別篇と見なしている。
- 4) 馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（七）』、上海古籍出版社、2008 年 12 月。
- 5) 復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会『《上博七・武王踐阼》校読』、復旦大学出土文献与古文字研究中心、2008 年 12 月 30 日。
- 6) 四庫全書所収『大戴礼記』や黄懷信主撰『大戴礼記彙校集注』（中華書局、2005 年）等は「敬勝怠者強、怠勝敬者亡。」に作り、清、王聘珍撰『大戴礼記解詁』（中華書局、1983 年）等は「敬勝怠者吉、怠勝敬者滅。」に作る。
- 7) 郭店楚簡とは、1993 年に湖北省荊門市郭店村の郭店一号墓から出土した竹簡のことであり、その解読と整理を経て、1998 年に『郭店楚墓竹簡』として文物出版社から刊行された。書写年代については、墓葬形態や出土器物から、前 300 ～ 前 278 年と推測されている。内容は、儒家系文献と道家系文

献とであり、儒家系文献がその大半を占め、戦国前期から中期に至る儒家思想の実態を示す資料として注目されている。竹簡に筆写されている文字は、典型的な「楚系文字」である。

郭店楚簡『緇衣』・上博楚簡『緇衣』は、若干の異同はあるものの、『礼記』緇衣篇と基本的に同一の文献である。これらの発見により、『礼記』の成立年代を戦国末から秦漢にかけてとする説や前漢時代とする説が成り立たなくなり、大部分が先秦の古書である可能性が高くなってきた。

- 8) 宋、王応麟『践阼篇集解』（『玉海』200巻附刻13種所収）には、「亦不可以忘、「以忘」一作「不志。」とある。四庫全書所収『大戴礼記』や清、王聘珍撰『大戴礼記解詁』（中華書局、1983年）等は「不可以忘」に作り、黄懐信主撰『大戴礼記彙校集注』（中華書局、2005年）は王応麟の説を挙げた上で、「不可不志」と作るべきであり、「不可以忘」と作るのは誤りであると指摘する。
- 9) 復旦大学出土文献与古文字研究中心研究生読書会「《上博七・鄭子家喪》校読」、復旦大学出土文献与古文字研究中心、2008年12月31日。
- 10) 侯乃峰「《上博七・鄭子家喪》“天後（厚）楚邦”小考」、簡帛網、2009年1月6日。

[付記]

本稿は、平成21年度日本学術振興会・科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

An error in copying of the Chu Bamboo-Slip from Shanghai Museum

— Focussing on the *Wuwang Jianzuo* and the *Zheng Zijia Sang* —

Tomoko KUSANO

Abstract

This thesis is written to indicate the words in the Chu 楚 Bamboo-Slip from Shanghai Museum which have a possibility to have an error in copying. The study is centered in the *Wuwang Jianzuo* 武王踐阼 and the *Zheng Zijia Sang* 鄭子家喪 in the *Shanghai Bowuguan cang Zhanguo Chu Zhushu* 上海博物館蔵戦国楚竹書 vol.7.

In the first chapter the words “yi 義” and “jing 敬” in the *Wuwang Jianzuo* is discussed. Although they are now transcribed in a completely different Chinese character, they closely resembles in Chu 楚 characters. This chapter refers to the part in the *Wuwang Jianzuo* which could be an error in copying.

In the second chapter the words “zhi 志” and “wang 忘” in the *Wuwang Jianzuo* is examined. In the *Wuwang Jianzuo*, there is a self cautioning sentence “民之反側，亦不可志”，which the king of Zhou 周，Wuwang 武王 inscribed. The intention of this chapter is to determine which character is better for this part, “zhi 志” or “wang 忘”. It is explained by two different points of view, the resemblance of the characters, and the meaning of the sentence.

In the third chapter another two words in the *Zheng Zijia Sang*, “er 而” and “tian 天” is studied to determine which character should be used in it. It is studied by comparing the words and phrases to other examples.

As written above, in this thesis, the present writer would like to examine the words that have a problem in the inscription, and state an opinion about it.

Keywords : the Chu Bamboo-Slip from Shanghai Museum, *Wuwang Jianzuo*, *Zheng Zijia Sang*,

An error in copying, Chu characters